ル・ケアのあり方が議論され、尊厳死の運動やホスピスの試みが進められる今日の関心からは、特に西川喜作と土岐雄三とが注目されるかも知れない。即ち、千葉国立病院精神科医長の西川喜作は、自らガンと知ってから現代医学においていかに死がおろそかにされているかを身をもって体験し、「死の医学」を最後のテーマにと決意した、と記されており、また老作家の土岐雄三は、「一切の食事、医療を拒否仕り、あの世へ参ります」と延命医療に対して果敢に戦いを挑んだ、と述べられている。

著者は本書の終わりに近く、次のように述べている。「現代医療は人の死を見えにくいものにした。死があいまいになれば、生も愛もあいまいになる。『これが最後』の『最後』はますますあいまいになる。……『最後の手紙』をだれにたいして、どう書くか――、それは死に直面した時の事柄ではなく、日常の生のいとなみの中にある事なのである」と。

本書は若い人々を目標に書かれたといい、平易な文章で明快に解説されているが、その内容は深く、その論旨は鋭く、広く一般の読者に対して、日本人の死生観を考える上で大きな示唆を与える好著といえよう。

（津田　進三）

〔筑摩書房ちくまプリマーブックス四四　一九九〇年　B六判　二三四頁　定価九八〇円〕

高山直秀訳注

『アンブロワズ・パレ　歯科口腔病医学、補整・矯正・義肢論』

訳注者の高山直秀氏は、われわれ歯科にとって貴重な人である。彼は都立駒込病院小児科に勤める医師だが、歯科に造詣がふかい。

昭和五十九年に、『フォシャール歯科外科医』（医歯薬出版）を翻訳出版された。原著者P・フォシャールは、十八世紀前期に先駆したフランスの歯科医で、「近代歯科医学の父」と謳われる。彼は一七二八年、世界で最初の歯科医学書となった『歯科外科医』を著わした。二巻からなるこのフランス語の原著が、高山氏によって日本語に全訳されたのである。

それは、大業である。歯科医学の原点ともいえるパイオニアの業績を、われわれはつぶさに知ることができた。歯科医師は、高山氏に満腔の感謝を捧げなければならない。

その高山氏がこのたび訳出されたのが、本著『アンブロワズ・パレ歯科口腔病医学、補整・矯正・義肢論』である。いうまでもなくパレは、近代外科学の父と尊崇される十六世紀のフランスの外科医である。われわれ歯科医師にとっても、偉大な先人だ。彼は、一五七五年にフランス語で『パレ全集』を著わした。大判八五〇ページにおよぶ大著である。

そのなかから、高山氏は歯科口腔病に関する記述を逐一チェックした。当時、歯科は未だ独立した科ではなく、パレは歯科医療

を特殊な外科の一分野として位置づけていた。したがって、補整・矯正・義肢論は「欠損を補整する方法」として一章を成しているが、歯科口腔病関係の記述は、全三十章のうち十章にわたっている。その殆んどが、半ページもしくはそれ以下に過ぎない。

訳注者によれば、解剖を含めて歯科口腔病関係は、合せて七六一行、全集の約一〇ページ分、全体の一・二%であるという。このように夥しい活字群のなかに、星屑のように散った歯科口腔病を、高山氏は根気よく丹念に抽出して集成したのである。

その結果、A五判九〇ページの本著ができあがった。用語解説や時代背景など、丁寧な注釈が付けられている。歯科医師にとって、こんな有りがたいことはない。あの膨大な全集を繙くことなく、労せずしてパレの歯科口腔病医学を一読できるのだから——。

折しもパレ没後四〇〇年に発刊されたが、この訳業は数年前から『日本歯科医史学会会誌』に連載されてきた。訳注者としては、既定の上梓であったろう。

このように関連領域において寄与している英才がいることを、医史学会の方々にも知っていただきたい。

（中原　泉）

〔デンタルフォーラム　一九九〇年　A五判　九〇頁　定価三、〇九〇円〕

Sunao Tawara 著、須磨幸蔵ほか訳
『哺乳動物心臓の刺激伝導系——房室束と Purkinje 線維の解剖学的・組織学的研究』

心臓の運動をつかさどる刺激伝導系——これは田原の命名にかかる——の一部に、房室結節がある。近ごろでは解剖学名に人名をふすことを意識的にさける傾向があるが、以前はこれを田原結節、あるいはアショッフ・田原結節と記憶していたはずである。

これを発見した田原淳（すなお）が、医学史上不当とも思える扱いしかうけていないのは、おおくの医学史書にみられるところである。さきにわれわれが翻訳したシンガーとアンダーウッドの通史では、刺激伝導系の発見者としてアーサー・キースやマーチン・フラックの業績が正しく評価されているにもかかわらず、田原はその名さえみられない。原著の復刻版の出版も翻訳書の発刊も、すべてはここから出発しているのではないかと考えられる。

その田原が、ヒト、イヌ、ネコ、ヒツジ、仔ウシなどの哺乳動物について、房室連結束の走行や組織学的所見を、正確かつ詳細に記載した約二百ページにもおよぶ原著 Das Reizleitungssystem des Säugetierherzens (1906) を、イエナのグスタフ・フィッシャー社から独文で刊行した。それから九〇年近くたった一九九〇年に翻訳出版されたのが本書である。訳者は心臓血管外科医（須磨幸蔵東京女子医大教授と島田宗洋国立小児病院医長）と解剖学者（島田達生大分医大助教授）である。

およそ一五年前、はじめて原著に接した訳者達は、偉大な先人